

# 言語学はなにを得て、なにを失ったのか

Acquis et pertes de la linguistique

鈴木 隆芳

Takayoshi SUZUKI

## 要旨

「言葉とは何か」と問われて、返答に窮して黙りこくってしまう人はそういない。この種の問題については、だれもが自分流の切り口を持っているものだ。だがそんな時、突然、「あなたが今話しているのは、それは言葉そのものことではありませんね。」と言われたらどうだろう。はっとして振り返ると、自分の言っていたことがなにも言葉に限った話ではないことに気づく。言葉と同じ用途、性質、役割をもったものなど他にいくらかもあるものだと思に至る。

言語学が得意としてきたのは実はこうした譬え話である。「言葉のように見えて、ほんとうは言葉でないもの」は「言葉そのもの」よりもよっぽど扱うに易しいからである。

ここでは、こうした「言葉のように見えるもの」が、言語学にもたらした功罪を考える。なぜなら、それは言語学にとって毒にも薬にもなってきたからである。

## 序 言葉にとつての古き良き時代

言葉が私たちの思念を言い尽くすことはまずない。言いたいことは山ほどあるのに、それを伝える言葉はどれもしっくりこない。なにか肝心なことがこぼれてしまうのだ。そこでやむをえず多言を弄する。描写を重ね、表現を練り込むことで、少しはそこに近づけると思うからだ。だが、実際は、虚しさのあまり、それでもしなければやっていられないというのが本音なのだ。ありのままの思いをこちらにたぐり寄せるにはどうしたらよいものか。

ここ最近の言語学は、言葉を越えたところにあるとされる純粹な意識や観念について否定的な言を重ねてきた。思うということが、言葉があつてはじめて可能になるというのはまあ認めてもいい。確かに、思惟にあつて言葉が内側で響いてるといふ実感もあるし、また、言葉にするこゝとではじめて観念が輪郭を帯びてくるというのも事実である。

しかし、そうした言葉の絶対権力に服従しつつも、言葉のむこうにあるものは黙ったままではないのだ。それは決して抵抗を止めず、抗議のサインをこちらにちらつかせてくる。現状の分析、分節、制度、分類、階層に対して否と、そつと首を横に振っている。真意を問おうと、それが発する不定形のメッセージの解読にただただ躍起になる。それでも、もどかしさは一向に晴れようとしなない。いつその事あきらめようかと思ふほどである。それで得られるのが安堵ならまだいいのだが、そうはならないのが現実のようだ。

ホフマンスタール著『チャンドス卿の手紙』の主人公フィリップ・チャンドス卿は自らが文学活動を放擲するに至つた精神状態を次のように言う。

私の症状といへば、つまりこうなのです。なにかを別のものと関連づけて考えたり話したりする能力がまったくなくなつてしまつたのです。<sup>(1)</sup>

友人がよこした手紙への返事として語られるチャンドス卿の精神のドラマは、言語への極度の不信から始まる。「ある判断を表明するためにはいづれ口にせざるをえない抽象的な言葉が、腐れ茸のように口の中で崩れてしまふせいでした。」という良く知られた一節は、チャンドス卿固有の精神状態を語ると同時に、作品の枠組みを越えた普遍的なテーマでもあり、それゆえ多くのヴァリエーションを生んできたといえよう。ただ、訳者の檜山哲彦氏も指摘するように、チャンドス卿はこうした言語不信に終始取り憑かれていたというわけではない。この言語不信は、それとは反対の状態との比較、対照によつて描写されている。

チャンドス卿の精神のドラマは三つの局面を経験する。順を追つて辿つてみる。

(1) かつて自らが「うるわしい感激」、「ある種の陶醉の持続」を感じていた頃をチャンドス卿は懐かしむ。それは「いかなる被造物も他の被造物を理解する鍵である」と信じられた日々、「一は他と同様」であり「存

在全体が一箇の大なる統一体」と見えていた時であった。当時思い描いていた「文学上の多くの仕事」、ヘンリー八世の治世について筆を執ること、ユリウス・カエサルにならない『箴言集』を編むこと、古代人の寓話や神話の智慧を解き明かすことなどは、そうした幸福な精神状態のもとではすぐにでも達成されるかのように思われた。

(2)それがうって変わって今の自分は「極端に小心な無力」に襲われるのが常となっている。関連し合っていると信じていたものはばらばらになり、「すべてが部分に、部分はまた部分へと解体し、もはやひとつの概念で包括しうるもの」はどこかへ行ってしまった。個々の言葉は自らのまわりで浮遊するだけで、それがもたらす関係づけや、比喩といったものはどれももうさんくさい。そんな今の自分にとって、かつて大胆な直観によって一気呵成に書き上げた過去の作品はあまりによそよそしい。その時の自分と今の自分のあいだにはどれほどの深淵があることか。

(3)そんな今でも「活気あるうれしい瞬間」が時として訪れる。「静かに急速に高まってゆく神秘の感情の波」に後押しされ、「恐るべきかかわりあい」が再現される。夕方、馬で散歩に出たとき、目の前に飛び出した鶉の雛の群と、かなたに波うつ畑の向こうへ沈んでゆく大きな夕日を見ただけで、ある光景が思い浮かぶ。再現されたのは、自分がその日の朝にまいた殺鼠剤によって死にゆく鼠の群の姿であった。「甘く鼻をつく毒薬の香りに満ちた、冷たく息づまるような地下室の空気」、「黴くさい壁にあたつてくだける断末魔の鋭い叫び」、「気を失い絡みあい痙攣する肉体」など。こうした日常の出来事を「いちだんと高くあふれんばかりの

生命で満たしながらあらわれるもの」は、名もなきもの、名づけられぬものである。この「言葉よりもさらに直接的、流動的で、白熱した素材をもってする思考」は、「きわめて深い安息」をもたらす。それは言葉が支えない奈落へ自分を突き落とすとはまるで違った安堵感である。今の自分が本を書かなくなってしまったのは、英語なりラテン語なりが、「物言わぬ事物」が直接に語りかけてくる言葉とあまりにかけ離れているからなのだ。

こうした三つの局面それぞれを、少し作品と距離を置きつつ言語表現をめぐる問題として一般化すると次のように言える。

- (1) 言語と事物の完全なる一致、言語への全幅の信頼。
- (2) 言語と事物の乖離、言語不信。
- (3) 言語の事物との再接近、特定条件下での「関係」の復活。

これらのそれぞれが、言葉と事物の関係を考えるにあたって、だれもが必ず一度は相手にする見解を示している。また、系統発生的な視点に立つなら、それらは言葉の学問が経験してきた発展段階を表しているとも言える。ただ今回は「(3)言語の事物との再接近」の問題については多くを取り上げないことをあらかじめお断りしておく。これについては機会をあらためたく思う。

前述の(1)、すなわち言葉と事物が一体となり、事物と言葉との間にいかなる不一致もないという状況を例にとるなら、それはミシェル・フー

コーが『言葉と物』の中で古典主義時代の言語について言っていることとほぼ一致する。

それ（Ⅱ古典主義時代が言語に貸しあたえる能力）は、いかなるものであれあらゆる表象に精確な記号をあたえ、表象相互のあいだに、可能なすべての結合関係を設定する能力にはかならない。言語があらゆる表象を表象しうるかぎりにおいて、言語はとうぜん普遍的なもの宿る場である。みずからのもつ語のあいだに世界全体を収用しうるような言語がすくなくとも可能なものとして存在しなければならず、逆にまた、表象されうるものの全体としての世界は、その総体において、一個の〈百科事典〉となることができなければならぬ。<sup>(2)</sup>

ここでは世界（Ⅱ表象されたもの）と言葉（Ⅱ表象するもの）の間には過剰も不足もない照応が成立している。それは一方に世界、一方に言葉という独立した二項を設定する必要がないほどの完全な一致である。語はみずからの継起の中に世界全体を取り込み、世界全体は、そうした一連の語による項目化、事象化、不連続化を経て「百科事典」となり、認識対象としてあらわれるという。

だからと言ってこの時代に言葉を対象にした学問が存在しなかったわけではないとフーコーは念を押す。それはむしろ積極的に行われた。言語と世界の表象関係が完全であればあるほど、言葉を知ることはその

まま世界を知ることでもあったからだ。文法や統辞法は単なる言葉の規則であるに留まらず、それらは世界の秩序の反映でもあった。したがって、言語を整備し、精錬することがそのまま学問の対象となるのも当然なのである。「認識とは、一個の言語であり、言語が磨かれぬままの学問であるのとおなじ程度に、学問はよくできた言語である。だから、すべての言語はつくりなおさなければならない。」<sup>(3)</sup>

こうした環境からは言葉そのものに対する不信なり疑念なりが生じる隙はない。それらはすぐにも転嫁され、世界のありかたに対する問いへと昇華する。「言語は目に見えぬもの、もしくはほとんど目に見えぬもの」<sup>(4)</sup>であるということは、言葉が世界の究極の像であることの証であって、そこには言葉の外にある「物」じたいなどはない。二〇世紀の言語学が、なにかとひどく言いながらも「存在するもの」として措定せずにはいられないあの「実質」が生じる余地はない。言語化されない事象がたとえあつたとしても、それは、言語（Ⅱ認識）が未熟な段階にあるためであつて、言語の整備が完成した暁には、現時点で未解決の問題でさえも、ことごとく言語という知の編み目によってすくい上げられることになる。

私には、こうしたフーコーの「人文科学の考古学」が実際にどの程度まで正しいのかわからない。それは、この仮説の二義性とともなうからである。フーコーはここで、古典主義時代の言語について語ることで、「古典主義時代の言語が、その本質において今と違っていた」と言いたいのか、または、「言語の本質は同じままで、言語に対する見方が違って

いた」と言いたいのか、そのいずれかがわからないのである。

前者の仮説をそのまま受け入れることはできない。そもそも言語じたいの本質が変わるといふ考え方をそのまま鵜呑みにはできないからだ。

一方で後者は、あくまでも時代が経験した言語観の水準にとどまっている。この「言語観」が変わるといふのならかなりの程度まで納得はいく。ただ、その場合、「言葉に対する見方」に過ぎないものを指して、それをその時代の「知の構成」の源泉であると言ってみたとすることで、この仮説の大胆さと面白味は随分とそぎ落とされてしまう。

そこでなのだが、フーコーのこうした分析を史実的実証性から引き離してみてもどうだろうか。そうすれば、彼の言う古典主義時代というもの、凡時的に、言語にとつての「古き良き時代」であると想定できるのではないか。はじめは言葉と世界が一緒にあって、そこには完全な対応があった。言葉を知ることとは世界を知ることとそのままつながっていた。言葉で表すことのできない世界があるという苦悩を感じる。ことなどあるはずもなかった。だが、やがて、不幸にも言葉そのものが、世界から分離して現れてくる。すると、人は言葉に疑問を抱き、言葉による表現に苦悩する。言葉の向こう側にこそ真理があるという思いが強いほど苦しみは一層ひどくなる。こうした移行を、言葉の楽園と、そこからの追放という失楽園にも似たエピソードに喩えてみたい。追放がもたらしたものは、言葉に対する不信や懐疑ではあったが、それがなければ言語学は存在しない。この楽園を言語学はどう扱ったのだろうか。

言語についての理論は数多くあるが、そこには共通した前提があるよ

うに思う。言葉を対象として思索するには、まず、言語と非言語から成る世界が個々に存在するということ。次に、言葉の意味といふものが、言葉そのものの中にある程度は存在すると思うこと。後者において、言葉によって表象されるものが、言葉の内部で完結しているのか、または、非言語的な世界との交渉を必要とするのかは、それはそれで大きな問題なのだが、少なくとも、こうした二重化（言葉／事物、表象／被表象）を通してしかこの学問は生じない。言語学は根底においていつでも、「なにか」と「なにか」の対応を問うてきた。そしてこの問いを続けることが、この学問の自律性をぎりぎりのところで維持してきたのである。

事実、こうした対応関係を築くという努力を通して、言語学自身は多くの原理を獲得した。言語学が言語に与えた自律性、内的関係性、不連続性、体系性などはどれもその結果得られたものだと言える。しかし、この成果の裏には大きな喪失があるのだ。支払った代価は決して見過ごせないほどのものだった。ではいったい言語学は、なにを得て、なにを失ったというのか。

## 一 言語学が捨てたもの

言語学が形相 *forme* と実質 *substance* を区別するようになって久しい。以来この二つの水準を混同することは一貫してタブーとされてきた。言語は形相であって実質ではない、という公準からは差異、恣意性、体系についての多くの帰結が導かれる。ルイス・プリエトは、自然科学と

言語学の原理の違いを強調する。自然科学は物的現実に対しての新たな認識が、古い認識に取って代わることを学の旨とするが、言語学という人間科学では、最初にあった認識が他の認識と交替することはないと言う。なぜならば「この学問領域の対象を作り上げているのは、物的現実ではなく、物的現実の捉え方そのもの、すなわち、それを検討する視点とそこから生じる同一性だからである」<sup>5)</sup>。

こうして「物的現実」に投射される視点は、事物を切り分け、分節し、形相を生み出すという力を持つがゆえに神聖化される。例えば、「言語学ではある事物についてさまざまな視点から語ることは禁じられている。なぜなら、事物を存在させるのは視点の方だからである。」<sup>6)</sup>というソシュールの一節もこうした文脈で解釈されてきた。言語学が物的現実を外側に置き、みずからの内的自律性を確保するためにはこうした視点と物的現実の二分法がまずは必要だった。言葉を「ものの見方」とすることで、はじめて言葉の外に「見られるもの」としての物的現実を想定できるからである。

とはいえ、一方に「ものの見方」としての形相があり、一方に「物的現実」としての現実があるとすると二分法は、常に望ましい状態として遵守されてきたわけではない。視野を史的に広げれば、こうした現実の二重化を言語思想はそう簡単には受け入れなかったことがわかる。ジェラール・ジュネットは『ミモロジック』<sup>7)</sup>の中で、現代の言語学ならば、形相と実質を分離する論理のもとに簡単に切り捨ててしまうであろうプラトン(『クラテュロス』)から二〇世紀に至るまでの一連の「クラテュロ

ス主義」の著作を紹介している。それらが一貫して呈しているのは、言語とそれが表す「事物」、「観念」、「意味」との間にはなんらかの必然性があるとする考えであり、つまりは恣意性へのアンチテーゼである。そこには実体論(言語は物の名前である)、差異の否定(記号はそれじしんで意味を持つ)、動機づけ(恣意性の否定)といった、後の言語学が異端とする思想が溢れている。例えば、子音よりも母音、男性形よりも女性形、ある言語よりも他の言語の方が「好ましい」と感じる感性は、言語外の秩序にその根拠を置き、言語を「現実の類似物」であると見なす限りにおいて恣意性の否定であると言える。

ただ、こうした模倣的<sup>ミメティック</sup>な言語の性質についての探求は、ソシュールを始めとする近代の言語学の出現とともに急に勢いを失ってしまったという。ジュネットはその理由をこう説明している。こうした恣意性へのアンチテーゼが相手にしてきたのは、言葉と事物の間の関係であって、二〇世紀のはじめに言語学が事物を実質として言葉の外に追いやってからは、議論の中心は記号内部のシニフィエ・シニフィアンという形相の水準に移ってしまった。結果、言葉の模倣的性格(≡実質のレベルでの反恣意性)についての希望的見方はすっかり下火になり、そしてこの事実をもって、近代言語学のはじまりとするのがジュネットの下した結論である。

確かに二〇世紀の言語学とは、「体系」、「恣意性」、「差異」、「価値」など形相の水準ではじめて真価を発揮する概念が、言語記号の即自的価値の否定を唱える徹底した関係論であるといえる。事象は言語の網を投げ

かけられることで存在し、その一方で、言語以前の事物は非定形の実質となり言語の側からの分節化を待っただけのものになる。

しかし、ジュネットのこうした種明かしにも似た結論には肩透かしをくった感がどこかある。そう簡単に言い切れるものではないと思う。本当に、二〇世紀の言語学は、記号内部の原理の追求だけでやってこれたのだろうか。やや先回りして本音を言えば、形相と実質は明確に区別されるどころか、実は、多くの原理を交換し合い、排除されたとされる実質こそが実は構造主義に至る言語学の発展を培ってきたのではないだろうか。

そこでまずは、言語学史上、形相と実質が明確に区別されるところを確認してみたい。プラハ学派のトゥルベツコイは音素を定義するにあたってこう言っている。

発声行為の過程で産出、知覚される個々の音には、音韻論上の示差的な個性だけでなく、その他の多くの個性がある。したがって、こうした音が音素であるとは言えない。ただ、そうした音のひとつが、特定の一音素の音韻的特徴すべてを含んでいるという意味において、それは、音素の実現したものであると言える。発声行為によって生じた言語の音それだけが音素になることは決してない。音素というものは音韻論上示差的特徴以外のいかなるものも含まないからである。実際に発された言語の音には、そんなことは言えない。言語中に現れる具体的な音の方こそが、むしろ音素の単なる物

### 質的象徴と言うべきだ。<sup>(5)</sup>

ここでは音韻論の常識が述べられている。音素とは「音韻的特徴」のみから構成された単位である。トゥルベツコイが強調するように、現実の音がそのまま音素になることはない。そうした音は音韻的特徴以外の特徴を含んでいるからである。語の識別には参与しない音のヴァリエーションを音韻論は物質的実体、すなわち実質とみなして排除する。したがって音素は形相の水準にある。言語が「ものの見方」なら、音素とは「音の聞き方」を強制する装置ということになろう。音韻論の体系にとつて実在するのは、もちろん音素の方である。現実の音こそが、その実現であり象徴なのである。

バンヴェニストは、音韻論が音素を得るための操作として分割 segmentation と代入 substitution をあげている。「分析の手続き全体は、要素を結合させている関係を通して要素を画定することである。こうした分析は、相互依存する二つの操作から成っており、他の操作すべてもこれらに依存している。」<sup>(6)</sup>ここで分割によって言語単位はそれ以上還元できない要素にまで分割され、その分割の正当性は代入操作によって検証される。音素はまだ終極の単位ではない。なぜなら、音素はさらにその中に複数の弁別特徴 traits distinctifs が存在するからである。/p/の中には「閉鎖性」、「両唇性」、「無声性」という弁別特徴が同時に存在している。これらは語や音素と違って連辞関係を形成しないが、他の弁別特徴をそこに代入することならである。「無声性」のかわりに「非無声性」

(つまりは「有声性」)を代入すれば、音素  $\langle b \rangle$  が得られるからである。音素  $\langle p \rangle$  として認識される現実の音にはいうまでもなく無数のヴァリエーションがあり、これは  $\langle b \rangle$  についても同様である。したがって、現実には  $\langle p \rangle$  と  $\langle b \rangle$  のどちらともとれる音を発声することができる。しかし、 $\langle p \rangle \cdot \langle b \rangle$  の対立が相手にするのは、そうした生の現実ではなく、形相の網によって掬われた同一性である。

こうした一連の操作を通して音韻論は音素の体系を築く。分割と代入という代数的操作によって、音素という同質的な単位を画定することで、音素の体系は内的均質性と完結性を手に入れることができる。ところで、こうした操作過程において、音韻論の体系が体系的であろうとするためにはどんな認識上の操作があったのか。以下では音韻論の後継者達の業績を見ることでそうした問題について考えてみたい。

## 二 記号学の例とそれについての考察若干

音韻論の原理は、ひとたび軌道に乗れば多くの成果をもたらす。関係性のみを基盤とする体系は、なにも音素に限った話ではない、というのがその言い分である。レヴィ・ストロースがヤコブソンの講演集に寄せた序文は、そうした展開を示唆している。

構造言語学が私に教えてくれたのは、多様な諸項にまどわされることなく、それら諸項を結び合わせている、より単純な、より理解し

やすい関係を考察することが重要である、ということである。「……」今日、歳月の経過とともに、私には、きわめて強い感銘を受けたこれらの講義の主題がかつてないほどよくわかる。音素、近親婚の禁止といった概念がどれほど混質的であったとしても、私が後者についていだくようになった考え方は、言語学者が前者(音素)に与えた役割から着想を得ている。<sup>10)</sup>

「言語学者が音素に与えた役割」によって、音素の原理は言語学の領域から解き放たれる。混質的な事象の中に、体系化されたものを見極めようとする意志にとつてこれほど利用しやすい原理はない。音素にとつての弁別特徴があるように、他の体系にもそれに相当するものがあるはずだと推察することはそう突飛な発想ではないはずだ。

近親婚の禁止が人類にとつてかなりの程度まで普遍的なのは、そこに親族の関係性に基づく普遍的な原理があるはずだ。そう考えたレヴィ・ストロースは親族関係を婚姻という視点から再構成する。それまで言われてきたような風俗、モラル、遺伝への懸念などはどれも共同体ごとの多様性、個別性に振り回されてばかりで普遍的な説明原理とはならなかった。つまり、共同体が婚姻について呈する文化的、社会的多様性は、音韻論が切り捨ててみせる「実質」でしかない。婚姻関係の普遍的規則を構造から演繹したいと望むなら、現実の音から実質を排除するように、共同体から「実質」を捨てて、婚姻の是非を司る「単純な基準」を見つける必要がある。

そこでレヴィ＝ストロースは「女性交換の有無」という二項対立の基準を見いだした。これは婚姻という混質的事象を「弁別特徴」にまで還元したと言えよう。女性を外からもらうかわりに、その代償として、身の女性は外に嫁がせる。交換されるものは、交換されてはじめて価値を生じる。交換を伴わない近親婚は当然のこととして忌避されるというのがこの規則の根底にある「交換価値」の原理である。これは構造主義の成功例の最たるものと言えよう。あるがままの親族関係は、切り分けられ切り捨てられることで、婚姻にとつて関与的特徴のみを露わにする。さて、レヴィ＝ストロースの発見した規則について、これを間違いであると弾劾できるであろうか。実を言うとその余地はほとんど残されていない。ただしそれはこの理論が普遍的に正しいからではなく、「どんな子供も男が連れてきた女から生まれる」という彼の前提に立った時点で、もうこの結果は見えているからである。そこには、音素/p/と/b/の対立の分析をはじめめる時点で、すでにこの二つの音が最小の違いによつて異なっていることがわかつているのと同じしかけが施されている。音素の対照(＝前提)と対立(＝結論)は弁証法のプロセスではなく、双方がおたがいを冗長的に含んでいる。これを修辭的操作によつて前提と結果に分離したのである。つまり、「女性の交換」という弁別特徴は先の前提のなかにすでに書き込まれているのだ。そして、この自己完結性こそがこの体系が体系的であることを支えている。

もう一つの例としてロラン・バルトの『モードの体系』をあげる。副題に「その言語表現による記号学的分析」とあるように、ここでバルト

は、「ソシユールが記号学という名称によつてめざしていた記号について一般科学<sup>1)</sup>」から着想を得て、モード雑誌中にある言語、すなわちモード事象を語る言述の分析を試みる。「このロングカーディガンは、裏地なしなら大人びて見えますが、リヴァーシブルならコミカルな印象になります。」というモード言述中の語彙は、先に示した音韻論上の操作(分割・代入・置換<sup>2)</sup>)を施しうる単位から構成されているという。「裏地なし」「リヴァーシブル」という服の形状を表す語は、それぞれが置換可能な単位であると同時に、「大人びた」、「コミカル」という意味を持つている。この時点で「裏地なし/大人びた」、「コミカル」という記号(シーニュ)としての資格を得る。片方には、形態、物質、色といった衣服に関する特徴、もう一方には「大人びた」、「コミカル」といった性格的な特徴の他に「週末」、「シヨッピング」など、状況、職業、気分などが入る。そこで前者を記号表現(シニフィアン)、後者を記号内容(シニフィエ)と見なすなら、それはまさに記号<sup>シニエ</sup>であり、この記号が集合する場合こそがモードの体系となるのである。

モード言述はモード独自の文法に従う。そこにあるのは現実の服装からの統辭的制約である。帽子を同時に二つは被れないし、ポケットのあるマフラーも存在しないからである。そして、さらにはそこには決定的な「弁別特徴」が恒常的に存在する。それは特定のモード言述が「モードであるか否か」、つまりは、そこで言葉によつて記述される服装が現実にあるか否か「流行っているか否か」という二項対立の原理である。そこでは特定のモードの表現単位を「モードであるか否か」という弁別特徴のふるいにか

け、そこを通過する言語表現のみを相手にしている。モードの体系とはこうした共通の「モード」というシニフィエを持つ成員によって構成されたもののだといえる。

もちろんモード言述はそれが文法的にどうであろうとも言語としての要件を満たしており、これが言語の体系の一部であることは疑いようがない。ただ、モード体系＝言語体系というこの時点で分析を止めてしまうと、モード体系は少しも体系的ではなくなってしまう。言語はモードに比べればはるかに体系的ではないからだ。そもそも言語体系とそっくりそのまま重なるような記号体系を想定してみたとところで、バルトにとつてはなんの面白味もない。モード体系が、言語体系以上に体系的に見えるのは、これが現実の服装からの制約、制限によって、言語の上に乗った、非常に限られた数の項からなる疑似体系だからである。そこでは、項どうしの関係性が極めて直接的、相互的であることは確かである。

音韻体系の性質を根幹にすえる構造言語学の原理を、差異、価値、体系を扱うさまざまな他の記号体系に応用できることはわかった。ただ、ここで改めて問いたいのだが、こうして拡大する記号論理がもたらした所産とはなんであるのか。多くの事象が、実は、言語の、ような、価値体系を成しているということなのか。確かに、音素、婚姻、モード言述は見そう振る舞っているかのように見える。実際、こうした記号論理を他の様々な体系に適応するだけの無難な記号論はいくらでもあった。この辺でそろそろ気づいておかなければならない。もたらされた成果があまりに膨れあがった後では遅すぎるからである。いままで見てきた記号論

のひとつとして、その中心にあるはずの言語の性質について問うていたものがあつただろうか。言語と記号一般の隠喩関係はそれほど押し進められ、ほとんど忘れさられようとしている。この忘却のプロセスの出発点には言語と音韻論のただならぬ接近がある。ポール・リクールは次のように言っている。

記号の総体は、これを分析に服せしめるためには、一つの完結な体系とみなさなければならない。このことは、音韻論の水準において明らかである。音韻論とは、一定の言語のもつ種々の音素の有限的な目録を作成するものだからである。しかし、このことはまた言葉の水準においても真実である。というのも、一言語的辞書が示しているように、この水準はなるほど広大ではあるが、しかし無限ではないからである。<sup>15)</sup>

関係し合う諸項からなる体系は「無限ではない」限りにおいて「閉じている」と見なされる。「完結な体系」とは、ここでは全成員の関係が、その気になればごく単純な対立に還元できるということを条件としている。純粋性、均質性、客観性という言葉でこの体系を形容したくなるのも、ここでは諸項の存在したいの個性は捨てられ、体系全体を律する単純な基準によってそれらは演繹されるからである。構造言語学が理想としたのは、みずからの記号論理を正当化し、より強固にする、こうした言語であった。

後のプラグマティズムの立場からはこうした言語観は到底我慢できるものではない。ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリは『千のプラトー』の中で、構造言語学が指定する体系の内的均質性を批判して次のように言っている。

言語学が、音韻論、形態論、構文的定数にとどまっている限り、それは言表をシニフィアンに、言表行為を主体に結びつけ、アレレンジメントをとらえそこね、状況を外部に追い出し、言語をそれ自身に閉じこめ、プラグマティックを残滓にしようとするのだ。そうではなくプラグマティックは、外的状況だけにかかわるものではない。それは、言語が自身に閉じこもってはられない内的理由となるような、表現や言表行為の変数を出現させるのだ。バフチンの言うように、言語学が定数を抽出するものであるかぎり、一つの単語がいかにして完全な言表行為を形成するかを決して説明することはできない。<sup>14</sup>

ここでドゥルーズとガタリが支持するバフチンの言語哲学<sup>15</sup>の基本原則をバフチンの著作を参照しつつまとめると次のようにいえる。(1)意識はどれほど内的なものであれ、記号としてしか表現されない。(2)記号の意味は常に自分と他者とのあいだで決まる。(3)したがって、意識≡記号とは、どれほど個人の中にあるように見えても社会的な所産である。これは記号の体系内価値を絶対視する考え方に真っ向から対立する思想であ

る。バフチンは、ソシユールのラングを西洋の抽象的客観的言語論の到達点として批判する。言語は均質的体系内に留まっている限りなにも意味しない。意味が決定されるのは、社会との「交通」においてであって、それは、自分とは違うやり方でその言語を用いる他者との偏差、バフチン自身の言葉でいうところの「階級闘争」の中で決まるのである。

ここで両者の言語哲学の優劣について言及するつもりはない。ただ、こうした言語観の違いを、いわゆる構造主義からポスト構造主義への移行と解しては話しがつまらなくなる。問いたいことはそれは別にある。いったい、彼らが構造言語学を指して言うところの「言語をそれ自身に閉じこめる」とはどういう意味なのか。構造主義の言語観を批判するにあたって、それと対極にある言語哲学をぶつけたところでどうにもならない。必要なのは、そもそも構造主義のこうした言語思想の源をつきとめることである。というのも、構造言語学が自らの言語思想を作り上げるに際して、言語じたいを見つめずに他の思考の様式に言語を準えていることは、どうやら間違いがないからだ。彼らの言語観は自前のものではないのだ。だとすれば、そこに向けた批判も「言葉ではないもの」を相手にすることになる。つまり、実質／形相の対立概念を巧みに利用して、緊密な関係性から成る音韻体系を作りあげる原理を提供している知の様式を問う必要がある。

では、構造言語学の出発点となった音素の抽出を支える原理はどこからきたのだろうか。先ず言えることは、その基軸となった二項対立の原理は、言語に内在する原理ではないということだ。音素どうしが対立す

ると同じように対立し合う特定の二語など、どんな言語の中にもありはしない。モードの語彙がそう見えるのは、これが狭いモード体系の中で窒息した語彙だからである。そこにあるのは、言語とは異質の数理的原理で括られる思考様式である。構造言語学から始まる記号学を支えたのは、分離、抽出、分析、抽象を得手とする非言語的、さらに言えば記号的なものの見方なのである。言語そのものからは、こうした発想が出てくる余地はない。

先のジュネットの結論がつまらないと感じた本当の理由はここにある。彼の言うことに反して、近代の言語思想は、「実質」を捨てていない。確かに言語学は言語を形相と実質の水準に分けることで関係し合う諸項が共存する体系を得た。そこまではいい。しかしこの均質的体系こそが、言語にのしかかる新たな実質となってしまった。それはどんなに言語に似ていても言語とは違うものである。彼らは自らが排除すべきだと一貫して主張した実質の真っ直中にいる。そこで言語のことをすっかり忘れて、彼らの実質が提供する記号論理によって、せっせと記号学を育んでいる。

やがて音韻論の所産は言語にフィードバックされることになる。そこで導き入れた原理は、言語とは異質のものでありながらも、言語そのものを浸食しはじめた。それはすぐにも言語体系を乗っ取り、言語そのものに対する思索を根絶やしにした。あとに残るのは、音韻論の豊かな地盤の上に無造作に茂った記号学ばかりである。構造言語学が体系的であろうとする努力は、その努力じたいによって、構造言語学みずからを言

語そのものに対する思索の外側に置いてしまったのである。

つまり、言葉にとっての実質（Ⅱ内的ではないもの）には次の二つがある。

実質一 カオス、事物そのもの（であるような認識）、純粹観念。

実質二 数理的秩序、体系の均質性・客観性、二項対立。

こうした「言語ではないもの」と言語との間には、憧憬、嫌悪、交渉、妥協、利用、排除という様々な関係が生じてきた。チャンドス卿の憧憬とともにあったのは実質一であり、これを言語学は実質の名の下に排除した。一方、私たちが今対峙しているのは、その言語学が作ってしまった実質二の方である。

### 三 記号論理によって「意味」はとらえられるだろうか

レヴィ・ストロースとバルトが、記号論理の発展を言語ではない場求めたのに対して、グレマスはそれを言語内部の謎を解くために用いようとした。周知のように、言語学にとって「意味」はいつも後回しにされる問題であった。しかし、この言語の本質に近いがゆえにそれだけ厄介で敬遠されることの多い問題にまで、構造言語学はみずからの記号論理を振りかざして挑んだ。グレマスの『構造意味論』<sup>16</sup>は、その中でも極めて野心的な試みのひとつである。ここでも今まで同様に、音素の対立

原理を援用することが行われている。音素にとつての弁別特徴に相当するものを意味についても探そうというのである。意味の「基本構造は s vs 非 s という二つの意味素 *sème* に分節される。」<sup>17</sup> /p / b/ が「有声性」において対立するのなら、garçon「少年」・fille「少女」は、「女性性」の意味素の有無によって対立するという。そして「表意作用は関係の存在を前提としている」<sup>18</sup>のだから、この意味の弁別特徴を画定する作業を続けていけばやがては「意味の体系」が明らかになるといのである。

こうした試みは対立語彙が比較的単純なうちにはいいが、それらの意味を言述中であらえようとするとたちまち困難に直面する。例えば、homme「人間」・animal「動物」という語彙が「人間性」という弁別特徴の有無で対立しているとしよう。そこで *L'homme n'est pas un animal*「人間は動物ではない。」という文は、確かにこの弁別特徴を支持するかのように思える。しかし一方では、この対立している二語が等式で結ばれる文もまた簡単に成立する。*L'homme est un animal*「人間は動物である」という文は実際どこもおかしくはない。もっともこれを「人間もそもそもは動物なのだよ」とまっとうに解してもいいが、もう少し気を利かせて「男ってけだものね」や「オトコはオオカミなのよ」と受け取っても面白い。いずれにしてもこの文は、語彙のレベルでは対立する弁別特徴を解消してしまうことは確かである。こんなことを言うと、比喩の意味を持ち出した詭弁である、と抗弁されるかもしれないが、しかし、homme の意味について、「人間」よりも「男」を比喩的なし派的であるとする根拠はどこにあるのか。それを求めようとするなら使

用頻度や語源解釈に苦し紛れながらも委ねるしかない。とはいえ、そうした非体系的な要素は、そもそも構造言語学自らが見向きもせず切り捨ててきたものではなかったのか。

他の記号的媒体で成功を収めた記号論理をもって、言葉の内部に立ち入ろうとすると途端にこうした手痛いしっぺ返しをくう。もちろん、理論に手直しを加えながら当初の試みを続けることもできるであろう。しかし、そんな無理をするよりは、そもその前提、すなわち語の中に意味素が存在し、これが他の語の意味素と対立する、という考え方を改める方がよほど傷は浅く済む。音素の弁別特徴の個々が束になって当該の音素の同一性を確立するのと違って、語の意味の中にあるとした意味素が「個」としてあらわれるのは辞書などの静的分析環境において他になり。それをもって語の同一性ということなどあまりに無茶である。畢竟、こうした一連の意味を構造化しようとする試みが言語を相手にしたところ、<sup>19</sup>「語の意味は文脈によってその都度異なる意味としてあらわれる」という従来からの含蓄ある常識以上の認識をもたらすことはないのである。

#### 四 記号学と言語学の関係

非言語領域で培われた記号論理の言語への進出は、言語を記号一般と同様のものと見なすことで始まった。とはいえ、もとをただせばそうした記号一般は、言語と同様の性質を有する程度は共有しているものと了解

されることで記号としての生を授かったのではなかったか。音素はもちろん語ではない。それはわかっている。それでも音韻体系が呈する言語をはるかに凌ぐ関係性、均質性、純粋性を少しでも言語に措定できるのなら、その時私たちは言語について語るきっかけを得ることだろう。こうした論理の循環は、記号学と言語学の関係について、次のような相互的包摂関係をもたらす。

- (1) 記号学が言語学を内に含む。言語も記号の一種だからである。
- (2) 言語学が記号学を内に含む。記号も言語の一種だからである。

記号論はひとまずは(2)の立場から決意表明をする。そこで自分は言語学から着想を得たとはばかり言つてのける。これが記号学の誕生の間である。しかしそこで産み落とされた記号学は鬼子のように言語学の内側から食い破ろうとする。成長した記号学が言語学を圧倒するのにはそれほどの時間を要しない。この記号学の勢いに抗う言語学というものがあるのだろうか。もし、あるとしたらそれはどんな言語学であろうか。ソシュールの記号学は、今まで見た構造主義の記号論と同じように始まる。「言語がとにもかくにも記号体系であるということは、はつきりしているのではないか。それなら、必要なものは、記号やその法則が何かを教えてくださいのような記号の学問ではないか。」<sup>20</sup>ただ、ソシュールはこう言っておきながらも、「記号の学問」などに真摯に取り組む素振りすら見せない。するとその矢先に、彼の記号学の厄介な本性が露わになる。「記

号の性質というものは、言語においてしか見えてこないし、この性質は誰もが最も気にかけない事がらで成りたっている。」<sup>21</sup>言語の外では記号の性質は簡単に定義できる。だからこそ構造言語学はいくらでも他の体系に自らの記号論理を転嫁できたのである。とはいえ、そこにある記号とは、言語とはまるで異質の代数的操作によって演繹されたものであった。そんな記号が属する体系は、どんなに要素が多く、またどれほど関係性が複雑であったとしても個の集合なのである。こうした記号が言語と違うことなどソシュールにとっては当たり前のことだった。言語を言語たらしめているものは、構造主義者が大事にしている原理の中にない。「人は細部に細部をいくらでも積み重ねることができ、体系の重圧を何ら肌身に感じることはない。」<sup>22</sup>こんなものは言語ではないのだ。

多くの言語学者がソシュールの記号学と言語学の相互的包摂関係にとまどいを感じ、いずれかを選択することでお茶を濁してきた。しかし、どちらを選ぶうがその選択じたいにはたいした意味はない。片方の論理の中にもう一方を組み入れて安心しきったところどころでどうになるものでもない。活路があるとすれば、言語学・記号学の包摂関係じたいの意味を読み取ることであろう。

私たちは言語の周囲をぐるぐるまわっていたのであって、その中心にいたわけではない。言語の性質と位置を決定するために、基礎的な本質的な性格を内部から掘り返したことは私たちにはいっぺんもない。<sup>23</sup>

だからと言って記号論理ときっぱりと袂を分けてはいいいというわけではない。そうした「言語の周囲」にあるものこそが、言語についての形象、イメージ、比喩をもたらすからである。それらを通してやつと私たちは言葉について語ることができるようになる。これが最善の手段だと言うのではない。「誰もが最も気にかけない事がらで成りたっている」ものに近づくにはそうするしかないのである。

これまで私たちがやろうとしてきたことは、言語の性質をあきらかにすることである。けれどもそれは外的な試み、言語ならざるものを通すということによってだ。言語を記号体系（たとえば聾啞者の言語）に結びつけたり、あるいは一般的な記号に、さらに一般的には価値に、まだもっと一般的には社会的所産に結びつけたりしたのは、そのためにほかならない。<sup>24</sup>

しかし実際は、「記号体系」、「一般的記号」、「価値」、「社会的所産」はあまりに多くの成果をもたらしてしまった。成功するのはいつもこっちの方ばかりである。体系的、関係性が想定される事象にはこれらは極めて有効な操作概念であった。さて、言語はどうしたものか。時にそう思いだし、彼らも言語の問題を省みることがある。多くの成果を引上げ、恩返ししようと思えることもある。それでも、本気で踏み込むことは決してない。知っているのだ。外から眺めるにとどめておかなければ

いけないことを。「言語学に健全に取りくむには、外側からいくしかない」<sup>25</sup>。そこでもう一步内側に踏み込んだらどうなるのか。それをやった記号学者や言語学者は驚くほど少ない。

記号学・言語学の包摂関係についてのソシユールの考え方に親近感を覚えるにつれて、その一方では、従来の記号学が得体の知れないものと思えてくる。彼の意志を継いだとされる、音韻論者、記号論者、構造主義者が呈する自らの体系を信じて疑わないさまが、信者の憑依状態にさえ見えてくるほどだ。「言語ならざるもの」は言葉の学問を可能にした。ただしそれは、これが「言語のように見えるもの」でもあったからだ。そのあいだには「言語のように見えてはいても、ほんとは違うもの」というわずかな隙間がある。もし、言語じたいを見つめたいというのなら、そこを覗かなければならない。言語学者に課されているのはそういう仕事ではないか。

## 五 言葉の学問の可能性

これまでは、記号一般が言語そのものとは異なるということを繰り返して見てきたが、ところで、記号一般のどういう性質が言語と異なるというのだろうか。ここまでの語彙で説明するならば、数理性、均質性、（閉じた）体系的、（密接な）関係性などという言葉を用いることになろう。そこで、これと対極の性質にあるのが言語そのものである、というのはいまい言い方ではあるが、それだけでは、なぜ言語を記号一般と同様のもの

のとして扱ってはいけないのか、そこにはなにか不都合があるのか、という根本的な問題が問われないままである。そこで最後にこの問題を考えることで本稿を結びたいと思う。

記号一般の性質を考える上で、アンリ・ベルクソンが初期の著作で披露する言語観は興味深い。ただしそこにはちよつとした留保が必要であり、ベルクソンにとつての言語の位置づけは、私たちと根本的に異なる。彼には言語と記号一般の区別がなく、言語も記号の一種なのである。念のためこの対立を図式化しておく。

私たち 言語 対 言語以外の記号一般

ベルクソン 心的事象 対 言語を含む記号的表象すべて

それでもベルクソンの論述をたどっていけば、彼が批判する言語とは、これまで私たちが見てきたような記号一般のことを指すことがすぐにわかる。そこでの彼の言葉は、私たちがこれまで言語と記号一般について対照的に考えてきたことをあらたな語彙で敷衍するだけではなく、さらに多くのことに気づかせてくれる。

ベルクソンは『意識に直接与えられたものについての試論』の中で、言語が心的事象についての思考を妨げるといふ。「欲望」という心的事象を取り上げて彼は言う。人は欲望の変化を「強い欲望」、「弱い欲望」と言葉で表現するが、こうした言い方じたいが、「欲望には強度がある」と思いこませてしまう。「欲望」というものが、あたかも質を変えずに強度

だけが変化する量的な事象であるという印象を与えるのだ。結果、この感情は他の諸感情と並置され、心的領域で同一の場所にとどまったままその強度だけを増大させるものだとということになってしまう。

しかし、本当にそうだろうかと彼は反問する。では、なぜ、極度の欲望に見舞われた人は、欲望とは別の対象についても、それまでとまったく違った印象を持つようになるのか。なぜ、欲望だけではなく、すべての感覚、観念が変化したように感じるのか。なぜ、心のすべてが欲望に占められてしまうという感覚に襲われるのか。こうした矛盾をベルクソンは心的事象の性質を明らかにすることで解き明かそうと試みる。事実はこちらだ。「欲望が弱い」と感じる時は、この欲望の感情が他の心的要素に対し孤立している。反対に、それが強くなるというのは、欲望が他の心的要素に浸透し、それらを巻き込みつつ、そこで質的な変化がおこっているのである。こうして多くの感情を巻き込みつつ変化していく欲望は、まさに、「多くの感情を巻き込みつつ変化していく欲望である」という文字通りの意味において、それはもはや「欲望」と言いうるものではない。それはもはや心の全てに浸透しつつある情動というしかないものである。

間違いの発端はどこにあったか。それは、こうした心的事象を考えるにあたって、私たちが「欲望」という言葉から出発したからである。

言語は、愛情や憎悪や、人の心を動かす無数の感情の、客観的で非個人的な面しか定着できなかった。われわれは小説家の才能を、共

通の領域から感情なり観念なりを引き出す能力によって評価する。それらは言語のせいで見えないものとなっていた。彼はそれらの生々しい個性を無数におよぶ細部の描写を並べることで表そうと試みるのである。けれども一つの運動体の二つの位置のあいだに無限に点を挿入しても決してそれが通過した空間を充たすに至らないのと同様に、われわれが話すというただそれだけのこと、つまり、われわれは観念をお互いに連合させ、そしてそれらの観念が相互浸透を行うかわりに並置されるというただそれだけのことのために、(われわれは) 心が感じていることを全面的に翻訳することには失敗する。かくて思考は言語を用いては通訳できないままである。<sup>(26)</sup>

生成変化し続けることを本性とする心的事象を「言語」は表すことができない。「言語は、その動き(=意識上の現象)を固定化することなしにはそれをとらえることもできない」<sup>(27)</sup>からである。では、ここで彼のいう言語(=私たちの言う記号一般)はなんのためにあるのか。それはなにを扱うに優れた道具なのだろうか。ベルクソンの答えはこうである。

「こうした物質的対象のことを語る場合、われわれはそれを見たりそれに触れたりできることを暗に認めている。それらのものは空間の中に位置づけられているのだから。その場合には、それらを数えるのに、記号をつくり出したり記号であらわしたりする努力はなんら必要ではない。」<sup>(28)</sup>つまり記号は「物質的対象」を扱うのに都合なものなのである。だからこそ記号は、音素、親族関係、限定された言述の分析において活躍する

ことができたのだ。相手が「物」なら記号はどこまででもいけるのである。しかし、グレマスの例で見たように、「意味」の分析では記号論理はあまりに無力だった。それは言葉の意味というものが、言語の本質に近い心的領域で起こっている現象だからであろう。言葉が心の現象であるというのは、凡庸に聞こえるかもしれないが決して忘れてはいけない常識なのである。

こうしたベルクソンの言語批判をたどることで、言語学が記号一般に期待してきた役割をかなりの程度まで理解することができる。構造言語学がみずからの体系を形相 *forme* と称し、空間的ひろがりを持つ「物の集合」として定義したのは、記号が物的対象の分析に役立って欲しいという願いがあったからである。そして、さらには言語もそうであって欲しいと願ったのである。結果、言語は記号同様「数的性質を持ったもの」、「空間内で常に一定の場所を占めるもの」、「不動のもの」という物質が持っている性質を背負い込むこととなった。

これほど顕著な傾向を示す思考は構造言語学とともに降って湧いたわけではもちろんない。人は「物的対象」を扱うときにはずっとそうしてきたのだ。ベルクソンが、言語を批判するのは、彼のいう言語が「物」を扱うには向いているが「心」の現象をとらえるには不向きだからである。無論、言語が不要だと言っているのでは少しもない。それは「一般の社会生活」<sup>(29)</sup>を送る上でなくてはならない認識の道具である。実際のところ、私たちがとって記号一般が役に立つのはこの領域においてである。最後に一言。この頃のベルクソンは哲学における言語の無力さをひた

すら責めているが、実を言うと彼の言語に対する評価は、その後の著作を追うにしたがってずいぶんと変わってくる。言葉も使いようによっては、心的事象を表現できると彼もやがて言うようになる。もちろん今の私たちは知っている。「言葉はあなたのいうようなものではないよ」と、若き日の哲学者に言ってもやれることもできる。その時、どう言ったら言葉嫌いの彼を説得できるだろうか。そこで私たちの口をついて出る言葉こそ、私たちが言語について考えるのを止めない本当の理由であるように思う。

注

- (1) ホフマンスタール著、檜山哲彦訳、『チャンドス卿の手紙』、一九九一年、岩波文庫、一〇二頁～一二二頁。作品発表は一九〇二年、原題『手紙』。岩波文庫版巻末の檜山哲彦氏の解説を参照。
- (2) ミシエル・フーコー著、渡辺二民・佐々木明訳、『言葉と物——人文科学の考古学』、一九七四年、新潮社、一一〇頁。
- (3) 同書、一一一頁。
- (4) 同書、一〇三頁。
- (5) ルイス・プリエト著、丸山圭三郎・加賀野井秀一訳、『実践の記号学』、一九八四年、岩波書店、一〇五頁。
- (6) E. de Saussure, *Ecrits de linguistique générale*, texte établi et édité par Simone Bouquet, 2002, Gallimard, Paris, p.203. (cité par la suite *ELG*) 前田英樹編・訳・著、『沈黙するソシユール』、一九八九年、書肆風の薔薇、一六七頁。同書からの引用に際しては翻訳に一部手を加えた。

- (7) Gerard Genette, *Mimologiques—Voyage en Carthyie*, 1976, Seuil, Paris. ジェラルド・ジュネット著、花輪光監訳、『ミモロジック——言語的模倣論またはクラチュロスのもとへの旅』、一九九一年、書肆風の薔薇。
- (8) N. S. Troubetzkoy, *Principes de Phonologies*, 1938 (1976, 1986), Klincksieck, Paris.
- (9) Emile Benveniste, *Les niveaux de l'analyse linguistique repris dans Probleme de linguistique générale*, 1, 1962 (1992), p.120. バンヴェニスト著、岸本通夫監訳、『言語分析のレベル』、『一般言語学の諸問題』収録、みすず書房、一九八三年、一二九頁。引用に際しては翻訳に一部手を加えた。
- (10) Préface écrite par Claude Lévi-Strauss in Roman Jakobson, *Six leçon sur le son et le sens*, 1976, Edition de Minuit, p.8, p.12. レヴィ・ストロースの序文。ロマン・ヤコフソン著、花輪光訳、『音と意味についての六章』、『二〇〇八年（一九九七年初版）、みすず書房。また、本文中でレヴィ・ストロースに言及する際には以下の著書も参照した。クロード・レヴィ・ストロース著、荒川幾男・小松敬三・川田順造・佐々木明・田島節夫共訳、『構造人類学』、一九七二年、みすず書房。クロード・レヴィ・ストロース著、馬淵東一・田島節夫監訳、『親族の基本構造』、一九七八年、番町書房。
- (11) ロラン・バルト著、佐藤信夫訳、『モードの体系——その言語表現による記号的分析』、一九七二年、みすず書房、五頁。
- (12) バンヴェニストは括弧内の前の二つ、バルトは後の二つの用語を用いた。ここでは併せて括弧内で示した。
- (13) ポール・リクール著、『構造、言葉、出来事——構造主義と言語学』、J.M. ドムナック編、『構造主義とは何か』、二〇〇四年、平凡社、二八〇頁。
- (14) Gilles Deleuze & Félix Guattari, *Mille Plateaux*, 1980, Minuit, Paris, p.104. ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ著、宇野邦一監訳、『千のプラトー』、一九九四年、河出書房新社、p.103。引用に際しては翻訳に一部手を加えた。

- (15) ミハイル・バフチン著、桑野隆訳、『マルクス主義と言語哲学——言語学における社会科学的方法の基本問題』、一九八九年、未來社。主に第一部と第二部を参照。
- (16) A. J. グレマース著、田島宏、鳥居正文訳、『構造意味論』、一九八八年、紀伊国屋書店。六七頁までの原理的説明の部分を中心に参照した。
- (17) 同書二八頁。
- (18) 同書二〇頁。
- (19) この例文は、加賀野井秀二『オールリール』朝日出版社に掲載されている。
- (20) F. de Saussure, *Deuxième cours de linguistique générale (1908-1909) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger*, texte établi par Eisuke Komatsu, Pergamon, 1997, p.7. ソシュール著、前田英樹訳・注、『ソシュール講義録注解』、一九九一年、法政大学出版局、一九頁。以下同書からの引用に際しては翻訳に一部手を加えた。
- (21) *Ibid.*, p.13.
- (22) *Ibid.*, p.28.
- (23) *Ibid.*, p.17.
- (24) *Ibid.*
- (25) *ELG*, p.109.
- (26) Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1927(1997), PUF, Paris, Bergson, p.152. アンリ・ベルクソン著、平井啓之訳、『時間と自由』、一九九年、白水社、p.129. 同書からの引用に際しては翻訳に一部手を加えた。また、本文中では原題の「意識に直接与えられたものについての試論」を用いた。
- (27) *Ibid.*, p.120.
- (28) *Ibid.*, p.122.
- (29) *Ibid.*, p.120.